

みこころ

第12号

2009年
4月12日

発行元：

カトリック城北橋教会 広報委員会

〒462-0847 名古屋市北区金城1-1-57

TEL(052)912-7123 FAX(052)935-2254

(HP)<http://johokubashi.mikokoro.net>



清水・平川作・イースター・エッグ

INDEX

「復活する」 プリヨ・スサント神父 (p2)

寄稿「復活祭を迎えて」～笹野スエコ、須藤ヨシ子、加納英雄、木全和子 (p3-p5)

特別寄稿 秋丸暢子、清水隆 (p4.p6)

シスター林の「おじゃまします」吉川陽子さんに聞く (p7)

不思議発見シリーズ 第7回、この人 (p8-9)

「聖ロレンソ・ルイス」(p10)

「聖心の聖母」称号宣言150周年 (p11)

「復活する」(マルコ十六章一―八)

主任司祭 プリヨ・スサント

この記事のタイトル、「復活する」は、新共同訳のマルコによる福音の十六章の前につけら

れているタイトルである。他のマタイによる福音、ルカによる福音とヨハネによる福音にも

「復活する」箇所はあるのだが、語り方は完全に異なっているのである。

他の三つの福音に比べるとマルコの「復活する」箇所は一番短く、マタイやルカと違って「大きな地震」や「天から下ってきた天使」(マタイ二十八・二)、「天使の姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように真っ白」(マタイ二十八・三)、また「イエスの遺体が見当たらなかった」や「輝く衣を着た二人の人」(ルカ二十四・三―四)などのことに関しては何も述べていないのである。

マルコでは、天使ではなく「白い長い衣を着た若者が座っていた」と書かれており、重大な出来事である「主の復活」がなんとなく控え目で、別に特別なことでもなく報告されたような気がするのである。

「若者は言った。『驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさつ

て、ここにはおられない。』」(マルコ十六・六)。イエスの復活について、イエスの出現ではなく、ただ若者が語った「十字架につけられたナザレのイエスはすでに復活して、ここにはおられない」という宣言だったのである。

復活されたイエスは「あなたがたより先にガリラヤへ行かれ、そこでお目にかかれる」(マルコ十六・七)。このような語り方で、マルコ福音者はわたしたちにイエスの復活について、そしてそれを信じることに、信仰について、何を教えようとするのだろうか。

神の子キリストの神秘を悟るには、人間の知恵だけ、つまり人間の思いや想像力などだけでは不十分である。イエスご自身との出会いは必要なのである。マルコ福音者はこの直接の出会いの必要性を強調するのである。そのために、マルコは主の復活の出来事について黙示文学的な表現を用いないで、新聞記事を書くような書き方で、あつた事実だけをそのまま伝えようとするのであろう。

どのような道なので、わたしたちが復活されたイエスと出会って、信じるようになったかを、振り返るには、この復活祭の当りは、良い機会であらう。主イエスのお墓に行った婦人たちが、そこでイエスの遺体を見つ

けなかったし、復活されたイエスとも会わなかったのである。

「ガリラヤ行けば会える」と、お墓の中の「若者」は告げたのだが、弟子たちにとって「ガリラヤ」とはどんな意味を持っていたのだろうか。イエスの最初の弟子たちのほとんどはガリラヤ湖で魚をとる漁師だったのである。ガリラヤは生活の場だったのである。主イエスもガリラヤから神の国の到来の宣教を始めたのである。

そして、この漁師たちも主イエスの弟子になってからも、主イエスと一緒にガリラヤ湖の周りの町や村を歩き、主イエスと一緒に神の国の到来を宣教したのである。つまり、復活されたイエスとの出会いの場は、お墓ではないのである。

弟子たちはガリラヤで彼らが生活したところで復活された主イエスと出会ったのであれば、わたしたちも、わたしたちが夫々生活する場で、主イエスと出会うのである。

いつ、生活のどの場面で、どのようにわたしたちは主と出会って、信仰者となったかを、今一度振り返って、復活された主に対する信仰を新たにし、喜びを持って復活祭を祝いましょう。

復活祭おめでとございます。

今年も御復活を祝うかのように桜が咲きました(4月5日)



ご復活祭を迎えて (幼き日の思い出)

マリア笹野スエコ

幼少の頃から日曜日や祝日（いわいび）には、教会へ行くのは当然だと思って来ました。大勢の我が家では、全員揃って四十分程かかる道のりを歩いたものでした。洋服は一番良い服を着て、と言えば聞こえは良いのですが、ただ普段着を洗濯した物でした。祈り本、ペール、ロザリオ、そして大事な座布団を脇に抱えて行きます。田舎の教会は板張りなので、座布団が必要なのです。その上に正座して座るのは当然で、幼い子供にとつて一時間近くかかる御ミサでの正座は、とても辛かった記憶があります。

親の口癖かと、思うくらい「ロザリオを唱えなさい、公教要理、教会へ・・・」とよく言われました。どうして、そんなに言うのか？と思いつつも、公教要理を勉強し、神父様の話を聞き、親からも聞かされてきました。その中で思い出される言葉があります。それは、一言だけ「天国に入るために・・・」と親から言われたことです。今、こうして振り返ってみますと、その言葉の中には、すべての教えが含まれているのではないかと思います。子供には一番分かりやすい教えで、親なりに考えたと言葉だったと思うのです。

日常生活で、仕事関係の人達、町内の人達、それ以外の人達とも話す機会があります。日曜日には教会へ行き、行事等にも参加し、終ればお茶を飲みながら、信徒の輪の中に入れていただき、楽しく語り合います。イエズス・キリストを知る者同士が、同じ道を進んでいると実感できるからです。

神を知る人、知らない人々の救いの為に、永遠の喜びに通じる道を示して下さいました。神の偉大さに手を合わせて祈るだけです。

生まれて何十回、御復活を祝って来たのでしょうか？年を重ねるたびに、復活とは何かと、自らに問いかけます。弟子たちが主の復活を信じない時があったように、現代社会で、目に見えない出来事を信じるのは、信仰心がなければ、信じるに至らないのではないのでしょうか。まさに復活は人間の想像力をはるかに超えていることなのです。自分の無力と罪深さを思い知らされ、人間の力だけではどうにも



十字架の道行き

伝統的な信心業である十字架の道行きを、今年もまたミサの前に、四旬節の五週間、日曜学校の子どもたちも先唱を担当し、各主日に三留ずつ、祈りました。また毎週金曜日の十時から、主のご苦難を黙想し、イエズスへの崇敬と愛を捧げてきました。

素晴らしい木彫の画像は十四留の「墓に葬られたイエズス様」で終わっていますが、ヨハネ・パウロ二世が、復活されたイエズスの十五留の必要性を説かれたため、一九七五年二月に加藤馨さんがガリ版で印刷してくださった緑色の冊子では十五留が加えられおり、当時はそれを使用して祈っていました。現在使っていますのは十四留ですが、最後に十字架の賛歌を唱え、復活を讃えて終わっています。（先唱は山本真優子ちゃん）

抜け出せない魂を光へと導いてくださったのです。世の中がどんなに変わっていかうと、「主は復活された」ことは変わらないのです。

子供の頃、親に言われるまま教会へ連れて行かれました。自分分はカトリック信者の家に生まれたから、教会へ行くのだと思っただけでした。それでも御ミサに与った後の心は、晴れ晴れしなかったことをはつきりと覚えています。聖書を読み、黙想を重ねて行くうちに、信者の家庭に生まれ、育てられたことは、大きな喜びに結びつくものだと思えるようになりました。本当に感謝しなければならぬと思っています。

教会が執り行う祝日を迎える時、我が家では決まって食べるものがありました。大きな寿司桶に、ちらし寿司が色鮮やかに入っていて、それを皆で食べられる喜びは何よりも替えがたいものでした。今でも、はつきり

と残っている思い出の一つなのです。

ある日、広報部の方から、御復活について何か書いてくださると依頼されました。私の一番苦手としていたことです。ですから、難しいことは書けません。が、私なりに主の復活を理解して信じ、永遠の喜びに満たされるよう、日々生活をしていきたいと願うだけです。「天国に入る為に・・・」

ゆるし

ルチア

須藤ヨシ子

桜の花もほころび、春の香りが漂ってきました。

ペトロ岐部と一八七殉教者列福式も終わり、これから私たち信徒は彼等の信仰に学び、福者のよるこびを人々に伝える使命を新たな思いで歩き出しています。

四旬節は、その信仰で身を浄め霊性を深める時です。信徒として日常をどう暮らしているのか、教会共同体の中で何を大事にして交わっているのか、十字架の道行きから気づいたことを実践して、証しをしていきたいものです。

私は教会から姿が見えなくなり、外の教会にもいかないうちのことが気になっています。何人かの方は信徒に言われた言葉に傷つき、ゆるせないでいると聞きました。問題は相互にあるとしても自分の言動が人にどう

映るのが振り返ることも大切だと思います。

私たちは主の祈りで、私たちの罪をおゆるしください、私たちも人をゆるしますと祈ります。私たちは他者から受けた痛みや傷をゆるすだけでなく、人に対してもゆるしを願うことが聖書の中でも語られています。

捧げ物をする前に、兄弟に罪を犯したなら、先ずゆるしを願いなさいと・・・。

人に対してゆるしを願う勇氣は和解を生み、神の愛にみたまれた関係がそこにあります。私たちは罪を犯しやすい弱い人間ですが、神の愛は私たちの罪をゆるし、救いの道へと導かれます。

ゆるしは愛の始まりであり、人との交わりをもっと強く豊かにしてくれます。互いに愛し合いなさいとは、ゆるしあうことから、このことを心にとどめたいものです。

受難から復活のいつくしみの十字架をしつかりと胸に刻み、復活された主キリストと共に、多くの人々とよるこび祝います。主キリストは真に復活されたアーメン・アレルヤ

ウクライナの首都キエフは、域性について特別に私の心に残ったのは、A教会の地域の人達は、に数えられた美しい町で、世界皆A教会に行くのではなく、神と何回も話していたのが印象に残っている。

モスクワより一時間四十分のフライトで待望のキエフに着いた私は、この町でロシア正教の信者だという独身の美しい女性に会い、ウクライナのロシア正教について話を聞く事が出来た。

ウクライナの

ロシア正教について

マリナ ヨセフィナ 秋丸 暢子

ウクライナ人全体の九〇%がと云う事だった。

何らかの信仰を持っていて、その中の約三〇%がウクライナ独自のキリスト教であるユニエイト・ウクライナ・カトリックである」と説明してくれた。信仰を持っていない一〇%には老人が多く、彼女の母親も祖母もソ連時代に信仰を捨てたらしいとの事だった。

首都キエフに於ける教会の地

「良心の糾明と痛悔 罪の告白 償い。しかし、特別な告解室は無く、神父様と一人で向き合い、具体的に全てを話すと、聴罪司祭は告白を聞いた後、適切な訓戒を与えてから、悔い改めの祈りを唱える様に、個別的にゆる

しの秘跡を与える。ロシア正教は、戒律がとてまきびしいのだ。教会の聖堂の中で、一人で祈りをささげても救われる気持ちになる人もいるし、聴罪司祭に告白して救われる人もいるのは、現代の信仰に関する一つの問題点ではないかと思っている。最後に心に残るパウロの言葉として、「あなたがたは主キリストを受け入れたのですから、キリストに結ばれて歩みなさい。キリストに根を下ろして造り上げられ、教えられたとおりの信仰をしつかり守って、あふれるばかりに感謝しなさい」コロサイ人の信徒への手紙二章六―七節。(以上)



私は今、荒れ野にいる

ヨゼフ 加納英雄

これまで身につけてきたこと、学んできたこと、信じこんできたことが、廃墟の土壁がポロポロと、剥げ落ちる態の心境です。わたしたち人間は未知の出来事に遭遇すると、「・・・でなければならぬ」の古い体制・感覚で、自分の感情のおもむくまま、勝手な好みの作り話で、誹謗と戒めの言葉で返ってくる。真心が伝わらず、理解できないモンスター・ペアレントが多い昨今、対人関係に摩擦や亀裂が生じます。

「おはよう」「さよなら」「ありがとう」など、社会通念上の挨拶すら否定され、目の前に大きな疑問がたちはだかっています。この荒れ野には神様がいない・・・。

宗教改革を成し遂げたキリスト者ルターは、修道院で修行し、自分には自己中心の我欲しかないことを思い知らされた。善行

をしながら、この行いの根底には自己愛以外の、何ものもないことに気づいた。ルターは、イエスも神と共に罪を責める存在でしかなかった。信じようとして信じられず、猜疑心にとりつかれるのが人間で、ルターも例外ではなかった。この疑う自分を見つめることによって、責めておられると思っていたイエスご自身が、逆に人間の罪を背負って、十字架にかけられ、人間の罪のために苦しんでくださった。自分の苦しみを、既に神様のほうから、苦しまれていただくと悟った。

『善きサマリア人のたとえ話』(ルカ一〇・二五―三七)のよう、「隣人をあなた自身のように愛せよ」のお言葉を失くしました。私、長い時間をかけ、貝のように硬く閉ざした心を、聖心の御像のように、開かれた心で、隣人愛に満ちた心姿にお導き下さい。

来春、桜の花が咲く頃には、祈りの楽園で、深い感謝と希望に満ちた、本来の自分自身の信仰生活に戻れます様に、祈る日々。多くの隣人に「無償の愛」で支えられていることを・・・。神に感謝！絶対に一年後には花咲く楽園にいる。

神の愛を信じて

マルガリタ・マリア 木全 和子

私達は皆、自分達がいつか死ぬと分かっている。しかし、大抵の人はまだまだずつと先のことだと考えている。でも年を重ねてきた今、私はそろそろ準備をしなければと考えています。

みこころ会でホワイト神父様

にお借りした上智大学のアルフォンス・デーケン師のNHKのビデオテープを見ながら二年間にわたって死について学ばせていただきました。死をみつめて 悲嘆のプロセスの中で死とどう向き合うか(伴侶を喪う前に)死への恐怖を乗り越える 自分の死を全うする さまざまな死を学ぶ 死に就いての生涯教育(一) 死についての生涯教育(二) 今、世

界のホスピスでは 終末期医療 死とどう向き合うか 死にまざる生命、以上です。私達にとつて、今からどう生きるかを考える素晴らしい勉強でした。生きる時間はかぎられていて、その時間を大切にせねばと思います。私と同じ霊名マルガリタ・マリアの友人から、最近マルガリタ・マリアのおメダイ(聖遺物の入った)をいただきました。友人は洗礼の時にいただいたもので、五十年以上も一緒だったのでと私にくださったのです。一つ年下だけなのにと申しますと、子供がいる貴女なら大丈夫

だと言つのです。子供さんにお願ひして・・・と、責任は重大です。

ある日の説教で、あす死ぬとしたらどう生活されますかの問いに、その方はいつも通りの生活しますと、答えが返ってきました。私ならあわてふためきまず身の回りのものを、あれもやり、これもやりと、一日では足りない、なぜもつと早くから後悔するでしょう。でも、その人は、いつも通りの生活をして、一日を過ごします。変える必要はない。神の愛を信じていますからと。



ホワイト神父様誕生日 おめでとうございます

ました花束とバースデイ・ケーキをプレゼントされ、ホワイト神父様は驚きと喜び、そして少しばかりの、

生涯現役の司祭として、これからも園長の大役を辞されたのですが、

・ ホワイト神父様が三月二十二日、八十二歳の誕生日を迎えられました。ホワイト神父様が秘密の内に準備され先生になるために来日されました。しかし、諸事情で聖心布教会は学校経営を断念しましたので、以来、各地で司祭として働きのがらも、みこころ幼稚園には深く、そして長く、かわってこられました。この教会の信者でも、お世話になった園児や父兄も多いと思います。四月からは、

小牧教会 テレジア伊熊末子 さんを悼む アウグスチノ 清水 隆

彼女は三月三日自宅にて、心不全で倒れられた。意識不明のまま三月十一日、六十八歳で帰らぬ人となられた。

小牧教会の早川神父は御通夜のスピーチで通報を受けた時、「困ったな、困ったな」と思った。司祭として回復を祈らねばならないのに、これからの教会の事を考えてしまった」と率直な反省の言葉で語られました。

最近では二年間の信徒会長を、今年も副会長であったという。女性の信徒会長は教区では他に一例しか知りませんが、教会内でいかに大きな存在で、司祭の片腕として活動されていたかが分かります。また特筆すべきは福音館での炊き出しへの参加であることだと思います。夫君の美博氏が語られました。故相馬司教の呼びかけに応じ、ホームレスのための炊き出しに尽力し、赤ちゃんをおんぶしてでも出かけ

た。それは三十年間に及んだという。

ポランディアは、一日か一日、一年か二年はやれるものである。しかし三十年続けるとは大変な事である。彼女はこれを自然体で続けたに違いない。歯を喰いしばってではなく、並々ならぬ意気込みでもなく、弱い人がそこに居れば駆け寄って手を差し出す、そういう人であった。回りの人々に笑顔を振り向けながら、声をかけながらであった。福音館にも小牧教会にもボツカリ空いてしまった穴はあるかと

二〇〇八年、突如として起こった世界不況によって、派遣労働という社会制度の中で働く若者たちが使い捨て安全弁の様に、企業からはじき出される現実私たちは直面しました。そして、日本の社会保障制度に入りきれない外国人労働者の、より深い惨状もたくさん報道されました。誰も半ばは驚きの中で「なんとかしなければ！」と思った事でしょう。

一月の教会委員会で神父様より、教会として働ける事はないのかと提案がありました。話し合いの結果、緊急に一年間「教会にいけないとあえず食べ物がある、生きられる」それに対応

思います。彼女の残した姿は皆さんに引き継がれるのではないのでしょうか。伊熊さんに続く

う、彼女の努力に続くこと。末子さんが残した大きなもの、二人の娘さんについてですが、お二人とも看護婦さんです。人のために働くこと、お母さんの姿勢に学んだのでしょうか。長女さんは、西春に二人の小学生男子の子供さん、次女さんはアメリカで米人と結婚し、四歳の男子をそれぞれ恵まれていると。お二人に御通夜で会い、神妙に挨拶した時、場違いのここにこした

できる準備をすることが決められました。毎月第一日曜日には、緊急支援募金として、役員が交代でお聖堂に立ち募金を募ることになり、信徒会・聖心布教会・岐阜教会からも支援金として各

十万円ずつをいただきました。そして三月一日のお聖堂での第一回緊急支援募金には、六万七千二百九十円も信徒皆様からの募金が集まり、その他の寄付金（ご復活卵、パンの売り上げ）もい

笑顔なのです。青年時の原田末子さんそっくりの健康美人でした。出棺の折の添え花では、さすがに泣いておられました。夫君の語った「末子は二人の娘を残してくれた」は実感でしょう。

美博氏は城北橋教会で、クワーク神父と息がぴったりで信徒会長を数年努められました。小牧教会へ移られて三十年位過ぎたのでしょうか、病身で週三回、透析に通う身で奥さんに先立たれた事は大変な痛手かと思われ

の団地で生協の働き、NPO法いただきました。三月二十二日現在、十家族（ブラジルの方）が来られています。乳幼児を含む子供さんも何人が居られ、必要な物も多岐にわたることと思われ。ミルク、オムツ、主食、調味料、石鹸、歯磨き粉などなどをお渡ししました。まだまだこの先、支援を必要とされる方が増えるであろう事を予想しながら取り

組んでいきます。長年の主婦の知恵を役立てる好機！お値打ちに必要なものを買うように努めてはありますが、まだまだよい知恵がありましたら、是非お知らせください。

人笹島共生会の理事も務められています。夫君の言葉のように、彼女は「突っ走った生涯」でした。福音館へ通う吉川さんが「神様はどうしてこんな良い人を早々と召されるのでしょうか」と、しかし彼女はキリストの証し人として、隣人を心から愛して生きた素晴らしい生涯であったと思います。私は青年時代からのお付き合いで、彼女を女傑と思っていました。今きれいな桜の季節ですが、成田君

井田君に続き、同期の桜がまた一本散ってしまいました。支援の品もたくさんお寄せいただきます。募金共々お礼申し上げます。誠に有難うございました。今後ともよろしくお願い申し上げます。子供服などの直ぐ必要なものは、掲示板でお知らせしたいと思えます。ご支援をいただけるものが有りましたら、いつでも支援物資箱にお寄せいただけましたら幸いです。

私たちは慣れない働きで不安な思いもありますが、まず神様に任せ、神父様、役員会のご指導のもと、皆様の見守りと励ましの中で教会共同体の働きの一部分を担うことが出来れば喜びです。神に感謝

（担当 八幡 田村 三井）

緊急支援の お願いと報告

百歳のお誕生日、おめでとついでいます

前信徒会長の平川政美さんのお母さんが、城北橋教会で初めて百歳のお誕生日を迎えられました。フランシスカ平川スエさんは明治四十二年三月十日の生まれで、三月二十九日に、教会で誕生を祝いました。車椅子でしたが、大変お元気で、盛大な



拍手に笑みを浮かべておられました。これからもお体に気をつけて、もっともっと長生きしてくださいませようにお祈りいたします。

転入

よろしく申し上げます

一月 横浜教区大和教会より

洗礼者ヨハネ 吉田 祐介
アンジェラ 吉田 桃子

三月、守山教会より

洗礼者ヨハネ 田口 保
モニカ 田口千恵子
クララ 田口香緒里
クララ 田口佐緒里
アシジのフランシスコ 田口 端樹
ルカ 田口 洸樹
転出
さよつなら、お元気で

東京教区松戸教会へ

フェリックス 金澤 信介
東京教区下井草教会へ
マリア・アスタ 田上 幸代

結婚

一月十七日

マリア 大宥 和子
奥田 利久



受洗

おめでとついでいます

クリスマス クリスマス
ナタリア ゴドジャリ静
アンジェラ ゴドジャリ花蓮
二月八日
ジョン・マリオ 鈴木 正宗
四月十一日
フランシスコ 木川 啓緒
クララ 木川 静



四旬節の間 よく頑張りました。

帰天

一月十三日

ヨゼフ 伊東 益留

一月十三日に帰天されましたヨゼフ伊東益留さん(享年三十九歳)の追悼ミサが、三月十五日にありました。益留さんの永遠の安息と、残されたご家族の平安のためにお祈りいたします。

編集後記



す。東京で哲学科を二年、福岡で神学科を三年、東京に戻って助祭叙階の準備を一年、計六年間にわたる長い道のりです。皆様のお祈りと、一粒会への入会をお願いいたします。詳しくは清水隆さんまで問い合わせください。また、当教会出身の援助修道会シスター尾崎一美さんが、神学生の養成と調理実習のお手伝いをされるそつで、片岡さんも偶然的の出会いに驚いたけれども心強いですと言っておられました。

三月十五日、黙想会の始まる前にヨゼフ片岡義博さんから、四月より名古屋教区の神学生として勉強を始めるに当たり、育てていただいた皆様に感謝したい旨の挨拶がありました。本当に嬉しいニュースでした。

黙想会で指導していただきました平田神父様のお話では、昭和四年に創立され東京神学校と戦後、福岡に設立された神学校が統合され、新たに「日本カトリック神学院」が、今春から再出発します。ですから、片岡さんはその第一期生になるわけで

なお、来年の春には、牧野神父様と高山神父様が銀祝を迎えられます。黙想会のお話のように、召命の祈りは、自分の召し出しとして行いたいものです。私たちは、洗礼を受けた時から司祭職に与っているからです。そつした祈りがなければ、召し出しは続きませんし、祈りも届かないのです。司祭が育つのは共同体次第であると、司祭・修道者・信徒が互いに協力し、助け合う必要性を説かれました。自分が担う司祭職とは？夫々が考えていきたいものです。

(後藤)

シスター林の「おしゃまします」

マリア 吉川陽子さんに聞く



会に通うこと
はありませ
んでした。洗
礼のための教
理の勉強はし
ましたが、カ
トリックにど
のような習慣
があるのか、
夫に聞いても
よく分からな
かったし、何
だか敷居が高
く感じたので
した。そこで
ある時、シス
ターに「教会
は敷居が高い
と漏らしたこ
とがありました
。決して高く
ありませんよ
」と回答され
ました。教会
に行かないこ
とへの批判が
あるのではな
い

厚生労働省の調査結果によると、三月末の時点で失職者数は約十八万四千人に達している。職ばかりでなく、衣・食・住を失い、失職者の家族にまで影響が及んでいる中、日本人、外国人問わず、最低限の生活ができるよう迅速な対応が求められる。このような中で、教会としても様々なニーズに応える援助活動が始まっている。そこで今回は長年、福音館でボランティアをされている吉川さんにお話を伺い、一キリスト信者として援助に関わることについて考えてみたい。信仰のきつかけ

洗礼を受けたきつかけは、結婚でした。夫は長崎出身で、カトリック信者の家系に生まれました。一方、私の家系はキリスト教ではありません。しかし「カトリックなら良い」という家族の了解を得て結婚し、受洗しました。結婚後はほとんど教

二人または二人がわたしの名によつて集まるころころは わたしもその中にいる (マタイによる福音十八章二十節)

いかと恐れていましたが、習慣や規則に強制的に従わせるという類の宗教ではないことが分かってきました。そのうちに子供たちが日曜学校に通う年齢となり、自然に私も教会に通うようになりました。私の召命

福音館での炊き出しを手伝い始めたのは、誘われたのがきっかけでした。当時、福音館の炊き出しの手伝いが不足していたのです。「野菜を刻むくらいなら」と炊き出しの準備側のお手

伝いを承諾し、なんとなく始めました。そのうちに窓口として城北橋教会としての代表となり、運営委員会に出席するまでになりました。関わり始めると様々な人たちの苦しい現状を耳にします。例えば、うどん屋を経営していたが、つぶれたために家族を連れてやってきたという人の話などがあります。実は私自身、夫の起こした会社が倒産し、負債を抱えるという状況に陥ったことがあります。この苦しい体験から、多重債務者となつて普通の生活に戻れないホームレスの人たちの気持ちに分かるのです。私たちも一つ間違えれ

ば、いつでもホームレスと化してしまうのです。炊き出しの準備側では、配給側のボランティアのように現状を直接見ることでできませんが、担当司祭からの話で現状を知ることが出来ます。「ホームレスはなまかわだ何故そんな人たちへのボランティア活動をやるのか」という批判を受けたこともあります。中にはそのような人がいるかもしれませんが。しかし本当に困っている人々を見過ごす訳にはいかないのです。

炊き出しボランティア
福音館の炊き出しは、共生会というNPO団体に協力するという形で行われています。そして食ばかりでなく、衣、住などのサポートで自立できるように促しています。食に関して言うならば、男性の方が多いホームレスの人々の生活はぐちゃぐちゃで、病気の人が多いことが分かってきました。そこで、きちんと食べていただくために、以前のように「おじゃ」ばかりでなく、味を変えて提供したり、古米でも精米したばかりのものを使ったりして工夫しています。コンビニや野球場から出る余った弁当を配布していましたが、こつした弁当を続ける

と糖尿病になり易いことも分かってきました。そこで栄養バランスを考えた弁当を、現在では三百六十食も作って配布しています。前は余つたものなど沢山の寄付が寄せられていましたが、現在のようないふ下では、寄付がどんどん減少していつております。最近の傾向として、若いホームレスの人たちが多く見られるようになり、彼らには特に自立して欲しいと願っています。信仰の目から

聖ロレンソ・ルイス フィリピン初の聖人・殉教者

昨秋、ペトロ岐部と二八七殉教者の列福式がありました。二十六聖人と二百五福者の他に聖トマス西と十五殉教者が、パウロ二世によって列聖されています。その殉教者の一人に長崎西坂で処刑されたフィリピン人、最初の聖者がいます。この縁

で十六人の聖人は一九八一年にマニラでまず福者となられたのです

き、ロレンソはこの事件との関わりを疑われま

ロレンソ・ルイスはマニラにあるピノンドで中国人の父とフィリピン人の母の間に生まれまし。彼の出生の正確な日付は、ピノンド教会の洗礼記録が破壊された為、知られていません(一六〇〇-一六一〇年頃)。彼はスペイン語をドミニコ会士から学び、侍者と聖賢保管係として活躍しました。彼は文字を書くという類稀なる才能に恵ま

れ、本格的な筆記者となり、教会の公式洗礼書、婚姻書と確認書を複写していました。

一六三六年、スペイン人に対する謀反という、彼らにとって「重大な犯罪」がマニラで起

した。そこでマカオ行き船があると知り、ドミニコ会上司の援助を願って船に乗り込みました。しかし、この船の行き先がマカオではなく、なんと日本を目指しているのです。ようやく船が沖繩に着岸した時、彼らがキリスト教という理由で逮捕され閉じ込められました。この時代、日本はキリスト教迫害の厳しい時代だったのです。彼らは一六三六年七月十日に、長崎に連れて来られ、一年以上もの拷問を受けました。例えば、死に際す前まで水に浸されるなどの水責めや、針を指先と皮膚の間に押し入れられたり、意識がなくなるまで叩かれたりしました。このような迫害に、棄教する者も現れました。

ロレンソも処刑されると脅かされて棄教を迫られました。この辛い罰を受けても、信仰を貫きました。「私は、決して棄教しません。私はカトリック信者で、私は全身全霊で神のために死を受け入れます。もし私に千回の捧げる命があるならば、すべてを神に捧げます。」

ロレンソの穴吊りが始まったのは、長崎の西坂において、一六三七年九月二十三日のことでした。処刑の後しばらく放置され、二日後の二十九日に窒息して息を引き取りました。その後遺体は火葬され、遺灰は海にまかれました。一九八一年二月十八日、ローマ法王のマニラ訪問の際、ルニタ公園にて教皇ヨハネ・パウロ二世によって列福され、一六三七年十月十八日に、ローマで聖者の列に加えられました。(シスター・クララ林)

後藤 奈津(エビリン)

聖ロレンソ・ルイスの言葉が私の心に深く残りました。私たちは彼のようにキリスト信者として、いや一人の人間として、命を犠牲にすることはできません。しかし、大げさに自分の命を犠牲にしなくても、私たちの日々生活の中で、彼が残した言葉を生かすことはできるはず。『私はカトリック信者で、私は全身全霊で神のための死を受け入れます。もし私に千回の捧げる命があるならば、すべてを神に捧げます。』

"I am a Catholic and I wholeheartedly accept to die for God. If I have a thousand lives to offer, I will offer them all up to Him"

聖ロレンソ・ルイスについて、在日フィリピンの方々の感想です

山本マリア・クリスティーナ・デ・ロス・サントス

「マニラの聖ロレンソ・ルイスの生涯を読んで思ったことは、フィリピンの聖人がキリスト者として、つまり本物のローマ・カトリック信者としての使命に影響を与えることができるということです。この聖人は、全ての人にとって、宗教をいかに深く自分の中に取り込んだかを試すということの模範であります。私にとって、彼の生涯は私をカトリックの信仰を価値あるものとし、主イエス・キリストをこの世の旅路の中心にするよう目覚めさせます。彼は、厳しい拷問や迫害、棄教を迫られる試みに苦しむこと、そして死へと自らを解放するように運命づけられました。にもかかわらず、彼の応えは、千回捧げる命があるなら、ローマ・カトリック信者として、いつでも死んでいくというものでした。この類のないキリスト教信条が、彼を私の崇敬する聖人にしたのです。彼を記念して、大きな神の愛の、彼の模範を私に思い出させるために、私の息子、長男をケン・レンゾと名づけました。

"Reading the History of the Life of St.Lorenzo Ruiz the Manila,a Filipino Saint can touch ones calling Christian, a real Roman Catholic.This Saint,is a model to everyone to test how deep one absorbs his Religion.For me,his life awakens me to value my catholic faith and make Lord Jesus Christ the center of my journey on earth.He was destined to suffer hardest torture,persecution and trials to renounce his faith,and free himself to die.Yet,his answer,if he has given a chance to live a thousand times,he'll always die as a Roman Catholic.This very unique Christian faith made him my idol Saint.In memory of him ,i name my first son Ken Renzo to remind me his example of my great love of God."

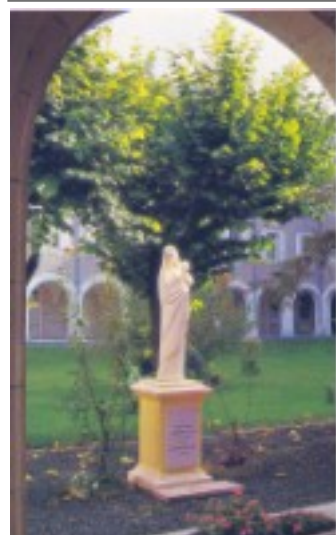
「聖心の聖母」称号宣言150周年記念

『希望なき人々の希望』である
聖母マリアへの信心

「マリアの奇跡的な援助に対する感謝」としてジョー・ル・シュヴァリエ神父が考案した新しい称号「聖心の聖母」の百五十周年を記念



し、昨年五月の「聖心の聖母」祝日から様々な準備が進められてきました。特に「希望なき人々の希望」である聖母マリアの生涯を黙想し、現代の様々な困難にあっても、私たちが日常生活の中において真にイエスの証し人となるように促されています。今年の三月二十五日（お告げの祝日）には、シュヴァリエ・フア



ミリーの三つの修道会から、「聖心の聖母」の小冊子が刊行されました。これは、聖書や教皇庁公文書、創立者の手紙などを引用しながら黙想する内容になっています。また各地で、百五十周年記念に関するセミナーやミサが行われる予定です。（シスター・クララ林）

が、事前に報告を翻訳してくださいましたし、またとても気さくなご婦人でしたので、意見交換や質問も飛び交いました。百五十年も前にシュヴァリエ神父様が現代の悪と呼ばれ、

宮崎口シート

（前略）私にとって、聖ロレンソ・ルイスは、信仰の模範です。彼が神の愛のために生涯を無償で捧げたことに敬服します。私は彼と同じようにフィリピン人であり、キリスト信者であります。信仰において強くありたいと、どれほど願っていることでしょう。特に人生において難しい局面にぶつかった時、聖ロレンソの取次ぎによって、神への忠実さと誠実さの内に、聖ロレンソの足跡を辿れる希望と力強さがいただけるよう、主である神に願っています。

"St.Lawrence Ruiz, is half Filipino/Chinese. During his youthful years he served as an altar boy or sacristan. A talented and good father of three children. St.Lawrence Ruiz, is the first Filipino Saint who was beatified by Pope Paul in Luneta Park, Philippines and was canonized SAINT on October 18, 1987 in Rome. His feast day falls on September 28. For me, he is a model of FAITH. I admire him for his selfless giving up his life for the love of GOD. Being a Filipino and a Christian like him, how I wish to be strong in my faith especially when I face difficulties in life. I am asking the Lord our GOD through his intercession to give me strength and hope to follow his footsteps, in his loyalty and faithfulness to GOD."



聖心布教会のアソシエイト代表を囲んで
ゼツカー神父様のご縁で、ベルギーからアソシエイトの世界代表であるリタ・クレールさんが来日され、三月二十八日（土）、みこころ会のメンバーに聖心布教会における信徒運動の現状、特に昨年十一月にドミニカ共和国でのアソシエイト世界会議の様子を報告していただきました。ベルギーの王室に勤務されている方だと聞いておりましたので、当日はいささか緊張したのですが、プリヨ神父様が、事前に報告を翻訳してくださいましたし、またとても気さくなご婦人でしたので、意見交換や質問も飛び交いました。百五十年も前にシュヴァリエ神父様が現代の悪と呼ばれ、

成人式おめでとう



レンレン ■ ミランダさんと水口忠君

信者動向

信者の再福音化に務められたのですが、今の私たちも全く同じ病を抱えています。この病気に打ち勝つには、シュヴァリエ神父は「愛だけがその薬」と言われました。神父様、シスター方と互いに協力しあい、またひとつの家族として繋がっている、世界中のアソシエイトと共にイエスの弟子として証していきたいと思います。聖心布教会の創立者であるシュヴァリエ神父は、母親からマリア様に対する特別な信頼を受け継ぎ、実際にノベナの祈りを通して、聖母に助けをいただきました。今年はその特別な称号をマリア様に贈られて百五十年になるそうです。聖心の聖母の祝日は五月の最終土曜日ですので、三十日は特別な行事があるようです。（後藤）

長崎での恵みの時

A Moment of Grace in Nagasaki

aki

小川 セシール

Ogawa Cecile

Last month, I was given the opportunity to join the pilgrims group of Nagoya for the beatification ceremony of the 188 Japanese martyrs. On November 23, we went to the Urakami Cathedral to hear mass. Fortunately, the celebrant of the mass, Cardinal Jose _____, was the one who would beatify the 188 Japanese martyrs. It was a great privilege for me that after the mass I was able to kiss his hand, which is a Filipino culture meaning respect. From there, we spent the day visiting the different churches in the area.

先月、私は188日本殉教者列福式のための長崎巡礼グループに参加する機会をいただきました。11月23日、浦上司教座聖堂でのミサに参加するために出かけました。幸運にもミサの司式司祭が188殉教者の列福を宣言したジョゼ・サライバ・マルティンス枢機卿様だったのです。ミサ後、枢機卿様の手に接吻することは

On the following day, November 24, the 188 Japanese martyrs were beatified. For me, it was a grace-filled moment, because I was able to witness this ceremony. It was solemn despite the heavy rains. During the ceremony, there were significant symbols that caught my attention. There were birds circling the altar during the heavy downpour of the rain, as if they also wanted to be a part of the ceremony. And the weather suddenly cleared up from the homily until the communion. There may be other interpretations for these things, but for me, they signify a message of faith that God was there.

私にとって大きな誉れであり、この行為はフィリピンの文化では敬意を表すこととなります。この場所から私たちはこの界隈の中にある様々な教会を訪問して過ごしました。

The homily of Cardinal Shirayanagi challenged me not to be afraid of my witnessing as a Catholic Christian. As the example given by the Japanese martyrs, I should also have the courage to practice my faith.

次の日の11月24日、188日本殉教者は列福されました。私にとってそれは恵みに満ちた瞬間でした。それはこの式での証人となれたからです。激しい雨の中、厳粛な様子でした。式の間、意義深い象徴的なことが私をとらえました。それは、激しい雨が降る中で祭壇上を旋回する鳥たちがいて、まるで式に参加したい様子でした。そして説教から聖体拝領のあたりまで、天気は突然晴れ上がりました。こうした事に他の解釈があるかもしれませんが。しかし私にとっては、「神がそこにいた」という信仰のメッセージを意味するものです。

Despite of cold wind and pouring rain, I was one of the thousand people who gathered and took part in the joyful ceremony of "Beatification of 188 Japanese Martyrs" in Nagasaki baseball stadium last Nov 24th Monday morning.

長崎巡礼レポート

Nagasaki's Report

宮崎 ローズ

Miyazaki Rose

冷たい風と降りそそぐ雨にもかかわらず、11月24日月曜日朝、スタジアムでの188人の日本殉教者の喜びの列福式に集まり、式に参加した何万もの人々の内の一人でありました。式は教皇ベネディクト十六世の代理であるホセ・サライヴァ・マルティン枢機卿によって行われました。

The ceremony was led by Car. Jose Sarvaiva Martin, a representative of Pope Benedict XVI. During the mass, newly beatified martyrs were introduced. Some died on the cross, others were drowned, burnt and beheaded. It's sorrowful! But, it shows their faithfulness in Christ by sacrificing their life into death.

ミサの間、新しく列福された殉教者たちが紹介されました。何人かは十字架刑で、他の人は水攻め、火あぶり、首切りで死んでいきました。それはとても辛いことです。しかし、キリストの内に死に至るまで命を捧げることで、彼らの忠実さを示しています。この大きな行事は私に、強い信仰を守り続ける希望を与えてくれました。殉教者たちは、怖がらずに日々の生活の中の全てと戦うよう私を駆り立てました。それは、私は独りではない、神さまはいつもそこにいてくださるということです。主よ、このような恵みと、良い健康や体力が伴った巡礼に参加できるという栄誉に与らせていただき感謝します。

For me, this big event gives me hope to keep my strong faith. The martyrs urged me to fight for everything in daily life without fear. That, I am not alone....G

わかもんウォークで5.8km歩いた
名古屋教区の青年たち。左から2番
目に水口忠君



雲仙教会の前で名古屋教区青年団

原城跡の天草四郎像前で



列福式会場でフィリピングループと野村司教様を囲んで

長崎駅で敦賀教会のジョイ神父様（写真右下）とも合流



列福式 アルバム



一八八殉教者列福式をうけて、日曜学校では宋国寺見学を含め六回にわたるプログラムを行い、信仰の諸先輩方の生き様を学んできました。学んでいくうちに、当時の信仰共同体がいかに互いに励まし合って生きていたかということが分かってきました。「苦しんで死ぬ」というところにアクセントが置かれがちな「殉教者」は、実は「信仰を生き抜いた人」であり、多くの信徒は、神を中心とした生活の中で、よく祈り、よく働き、互いに励まし合いながら「パライソ」を待ち望んでいたそうです。約三五〇年たった今、彼らは「一人も無駄にされることなく」主の栄光に与っているということ、私たちに証明してくれます。この力強い「証人」を目の当たりにして、子供たちに「あなたにとって『あかし人』とはどんな人？」という課題で、子供たちに絵を描いてもらいました。



木川信款くん(迫害下の信仰者)



木川啓緒くん(いのちの木)



中尾優香ちゃん(おじいちゃん・おばあちゃんの家の祭壇に向かって祈る姉妹)



中尾美咲ちゃん(祭壇に向かって祈る姉妹)



八幡美也子ちゃん(なかよし)



森野孝之くん(栄国寺の見取り図)



宮地翼くん(潜伏キリシタンの持ち物
- 十字の入った刀の柄 - と祈る人)



宮地海翔くん(潜伏キリシタンの持ち物
と祈る人)



若林昴樹くん
(あかし人とイエス様を重ねて)

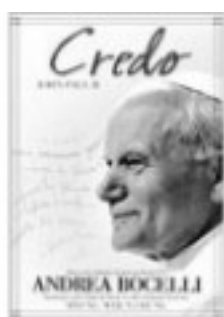


福田学人くん(天国に昇る殉教者)

...このような難しいテーマに、ご両親の助けを借りながら絵に取り組んでくれた子供たち。厳しい迫害下にある殉教者の苦しい場面が多いですが、私たちは列福式の説教で「恐れるな」というメッセージで励まされ、さらにこれを後押しするように、主のご降誕で「いつもあなた方と共にいる」とメッセージが送られます。神を中心とした生き方は、独りでは生きられません。だから共に歩める信仰共同体があることに深く感謝しながら、主のご降誕の喜びを共に味わいたいと思います。(みこころの聖母会 Sr. 林 明恵)

ヨハネ・パウロ 世
の思い出

マリア
高木 やす子



高木さんの寄稿にあったDVDを紹介！

『クレド～ローマ教皇ヨハネ・パウロ 世の思い出』
/ アンドレア・ボチェッリ

2005年4月に84歳で世界中の信徒から惜しまれて亡くなったヨハネ・パウロ 世の宗教活動をアンドレア・ボチェッリの歌う宗教曲とともに贈るドキュメンタリー。1978年の教皇選出に始まり、2005年に亡くなるまでの模様が当時の映像によって綴られています。また、ヨハネ・パウロII世は全世界を旅行し、「空飛ぶ教皇（空飛ぶ聖座）」といわれるほどで当時の映像の一部も含まれています。

世界的なテノール歌手アンドレア・ボチェッリは、ヨハネ・パウロ 世との関係が深く、ボーナス映像として、2000年にトル・ベルガータで行われた彼のライブよりジョン・ミュンフン指揮サンタ・チェチーリア国立アカデミー管弦楽団によるシューベルトの「アヴェ・マリア」が収録されています。

(Tower Records Japanホームページより抜粋)

表紙の写真がカラー

でないのが残念ですが、イスター・エッグを飾っていただいたのが作者の清水さんです。オーストリアのザルツブルグへ旅行された時に、色とりどりに彩色、装飾された、まるで芸術品の

ような卵を見て、教理の勉強中ということもあり、その魅力に虜になられたそうです。帰国後、さっそくネットで作り方を調べ失敗を繰り返しながらも、プリヨ神父様にうさぎを描いた最初の作品をプレゼントされました。神父様から冗談で「絵は平川さんに習うたら」と言われ、平川さんが通っておられるオランダ・ザンヌ・フオークアートの教室で絵の勉強をはじめられました。まず、生卵の上と下に電動ドリルで穴を開け、中身をストローで噴き出し、洗って乾燥させます。水性アクリルペイントで下地を塗り、花などの絵を描き二

又を塗ってから、穴にリボンを通すという段取りですが、壊れやすく、また球形ですので、失敗の繰り返しだったそうです。毎回、卵料理を作る時には、ストローで取り出した卵を使っているとのこと、その光景を想像しますと、ご苦労の前に笑ってしまいますね。

うさぎと卵は豊饒のシンボルですから、ご復活祭には欠かせません。昔この教会でも、ゆで卵を赤・青・緑で染め、庭のあちらこちらに隠し、それを子供たちが嬉しそうに探していたのを思い出します。うさぎがこの卵を悪戯で隠すという言い伝えもあり、イスター・バニーは復活祭のシンボルとなりました。

このアートのような素晴らしい卵は好評で、5万円の販売上げがあり、3万円を緊急支援募金に、2万円を教会に寄付されました。「ごみとして捨てていた卵の殻が、イエス様の御復活を祝うものとなり、チャリティーとして教会のために

なったのだから、これからも卵に穴を開け続けます」と笑って言われたのが印象的でした。また神田さんや岩本さんたちと一緒に、土曜日に行われる結婚式の時に、コーヒーマービスなどのお手伝いをされています。「人を受け入れることの出来なかった自分が、今では受け入れることが出来るようになり、嬉しい」と今の心境を語ってくださいました。神に感謝。

三月十五日、黙想会の
始まる
前にヨゼフ片岡義博君か
ら、四
月より名古屋教区の神学
生として勉強を始めるに

当たり、育ててくださった皆様に感謝したい旨の挨拶がありました。本当に嬉しいニュースでした。昭和四年に創立された東 京大神学校と、戦後、福岡に設立された神学校を統合し、新たに「日本カトリック神学院」として、今春から再出発します。片岡君はその第一期生となるわけです。東京で哲学科を二年、福岡で神学科を三年、再び東京に戻って、助祭叙階の準備を一年と、計六年間にわたる長い道のりになるわけです。お祈りと同時に一粒会をとおして、資金援助もお願いいたします。なお、来年の春には、牧野神父様と高山神父様が銀祝

を迎えられます。平田神父様から黙想会でご指導いただきましたように、召命の祈りを、自分の出しの一つとして考えたものです。私たちは、洗礼を受けたときから、司祭職に与っているから、そうしませんと、召し出しは続きませんし、祈りも届きません。「司祭が育つのは共同体次第です」と、司祭・修道者・信徒が互いに協力し、助け合っ
喜びの
時にこそ、自分が担う司祭職と
は、何なのか、今一度、考えて
みましょう。(後藤)

不思議発見シリーズ

あの説教台はどうなったの？



確か一九七〇年頃までは、内陣を仕切る低い木製柵の直ぐ内側に、高い説教台（五〇年史に写真が載っています）がありました。向かって左側にあつた、あの説教台は、どうして無くなったのでしょうか？これが、今回の不思議です。

映画の一シーンで、また欧州旅行で聖堂を訪ねられたりされた時、天蓋までついた立派な説教台があるのに、お気づきの方も多いと思います。西洋建築の

辞書で調べますと、昔はアンボ（ambo）と呼ばれる台が左右にあり、左で福音書、右で旧約聖書と使徒書が朗読されてきました。その後、会衆席の左前端に豪華な講壇が作られ、そこで聖書朗読と説教が行われるようになりしました。それが、前述の説教台でカンツェル（kanzel）と呼ばれていました。会衆からよく見えるように高く、そして内陣の一番前に作られたのです。マイクのなかつた時代ですから、

天蓋も見た目だけではなく、音響効果も考えて、という面もあったのでしよう。西部劇などでは牧師さんが祭壇よりも高い所から説教している場面がよくありましたよね。プロテスタントは説教を大切にしているからでしょうか。

ところで、私の持っています一九五九年、光明社発行の典礼聖歌集には昇階唱・グラドゥアーレ（graduale）という部分があります。今の答唱詩編に当たる

ところですが、先唱者が、この高い説教台に昇るための階段から詩編を歌い、会衆が答唱を歌つたところから、昇階唱と言われるようになったと言われています。

さて、謎解きに戻りますが、第二ヴァチカン公会議の精神から、福音の朗読や説教は、高い場所からするのではなく、会衆と同じ高さからした方が良いという考えから、今のようになつたと言われています。イエス様も自分を低くして、民衆に分かりやすく、たとえ話をされました。

また司祭が朗読する福音書も信徒が朗読します旧約や使徒書

も、神様のみ言葉ですから、信徒も同じ場所からするようになったのでしよう。しかし、朗読台は「神の言葉の食卓」（啓示憲章21）ですから、祭壇と同じように神聖な場所ですので、十分注意したいものです。

ローマミサ典礼書の第五章では《朗読台》は「神のことはその尊厳のゆえに、教会堂の中にふさわしい場を設け、そこから告げ知らせるものとする。それは、ことばの典礼の間、信者の注意が自然に向けられる場所でないといけない。……朗読台はそれぞれの教会堂の構造に応じて、……信者からよく見え、言葉がよく聞き取れるように配置しなければならない」とあり、右側だ左側だとか、あるいは階段は無しにしなさいという具体的な記述はありません。但し、布池のように左側にある教会が多いようつです。

（ローマミサ典礼書の新総則はまだ販売されておりませんが、暫定版ももうありませんので、ネットで公開されています英文からの訳を利用しました）

（後藤明憲）

教会のこの人

『復活の卵に魅入られました』 ディンプナ 清水綾子さん



表紙の写真がカラーでないのが残念ですが、イースター・エッグを飾っていたのが作者の清水さんです。オーストリアのザルツブルグへ旅行された時に、色とりどりに彩色、装飾された、まるで芸術品のような卵を見て、教理の勉強中ということもあり、その魅力に虜になられたそうです。帰国後、さっそくネットで作り方を調べ失敗を繰り返しながらも、プリヨ神父様にうさぎを描いた最初の作品をプレゼントされました。神父様から冗談で「絵は平川さんに習ったら」と言われ、平川さん（今年もまた復活祭の蝋燭に素敵な絵を描いていただきました）の通う「オランダ・ザンス・フォークアート」の教室で本格的に、絵の勉強に挑戦されました。まず、生卵の上と下に電動ドリルで穴を開け、中身をストローで吹き出し、洗って乾燥させます。水性アクリルペイントで下地を塗り、花やうさぎなどの絵を描きニスを塗ってから、穴にリボンを通すという段取りですが、壊れやすく、また球形ですので、失敗の繰り返しだったそうです。毎回、卵料理を作る時には、ストローで吹き出した卵を使っているとのこと、その光景を想像しますと、ご苦労の前に笑ってしまいます。

卵は豊饒のシンボルですからイースター・エッグの風習が出来たようです。昔この教会でも、ゆで卵を赤・青・緑で染め、庭のあちらこちらに隠し、それを子供たちが嬉しそうに探していたのを思い出します。うさぎも豊饒のシンボルですが、この卵を悪戯で隠すという言い伝えもあり、イースター・バニーは復活祭のシンボルとなりました。このアートのような素晴らしい卵は大好評で、5万円の売り上げがあり、3万円を緊急支援募金に、2万円を教会に寄付されました。「ごみとして捨てていた卵の殻が、イエス様の御復活を祝うものとなり、チャリティーとして教会のためにもなったのだから、これからも卵に穴を開け続けます」と笑って言われました。また神田さんや岩本さんたちと一緒に、土曜日に行われる結婚式の時に、コーヒーサービスなどのお手伝いをされています。「人を受け入れることの出来なかった自分が、今では受け入れることが出来るようになり、嬉しい」と今の心境を語ってくださいました。神に感謝。

典礼における「神の名」に関する指針

なりません。これが神聖四字といわれるものです。ユダヤ人は、この「わたしはある」と言う名前を呼ぶことを畏れ多いとし、また主の名をみだりに唱えてはならないという十戒の教えもあって、昔からYHWHをアドナイ（主）と読み替えるようにしていました。そのため、典礼の場においては、神聖四字は発音してはならないものとされ、伝統的に「主」と呼び変えてきたのです。その上、YHWHは全て子音ですので、どのように発音されていたのかも分からなくなってしまうました。そこで、アドナイの母音を神聖四字につ

昨秋、突然に「典礼聖歌」で、神聖四字（YHWH）を「ヤーウエ」と呼んで歌って来たのを「主」に変更するようというお知らせがありました。詳しい説明もなく戸惑ったものでしたが、四旬節第四主日の答唱詩篇に、この該当箇所があり、この指針に従って新しく変更されたものを歌いました。

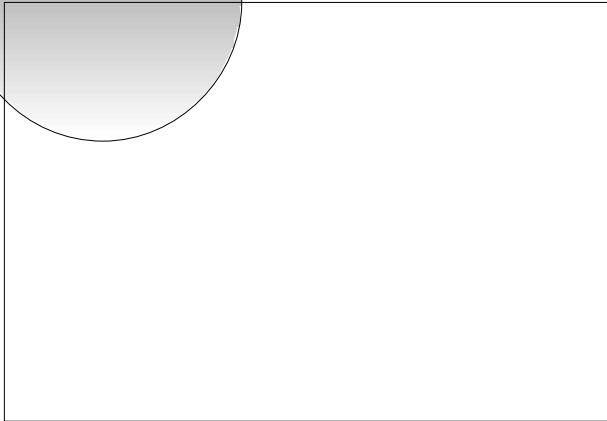
さて、この機会にその指針を読み直してみました。あなたの名は何かというモーゼの問いに答えて、燃える柴の間から、「わたしはある」というものだ（出エジプト3・14）といわれた神の名であるヘブライ語四字を、ラテン語に置き換えますと、YHWHと

けて、「エホバ」と便宜上訳していた時代もありました。しかし、最近では「ヤーウエ」と発音していたという学説が有力になったため、共同訳聖書でも同じ表記されています。しかし、神の名は伝統的に、ヘブライ語ではアドナイ、ラテン語ではドミヌスと訳されてきており、近代語に翻訳する場合も、同じ意味を持つ言葉で訳さなければならぬという指針は当然なことなのです。ただ、ヘブライ語のアドナイとYHWHが代わる代わる用いられている場合は、アドナイは「主」、YHWHは「神」と訳すようにという指針になっています。

（後藤

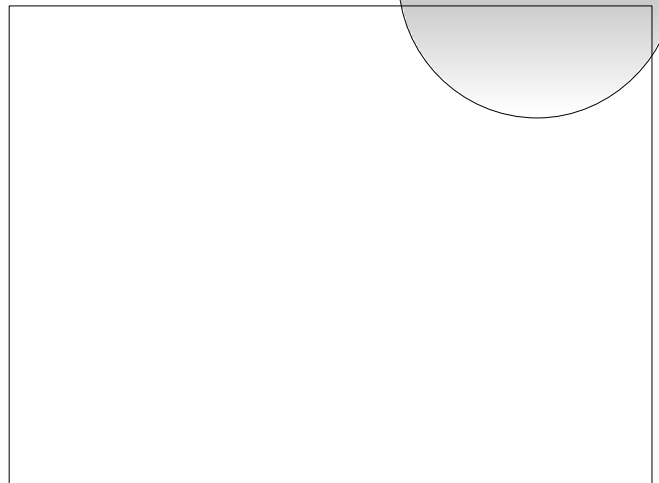


初聖体 (5月25日)



写真で振り返る
城北橋教会
行事報告

堅信式 (10月5日)



ヘルマス神父様 初ミサ (9月7日)



マックバザー (10月12日)



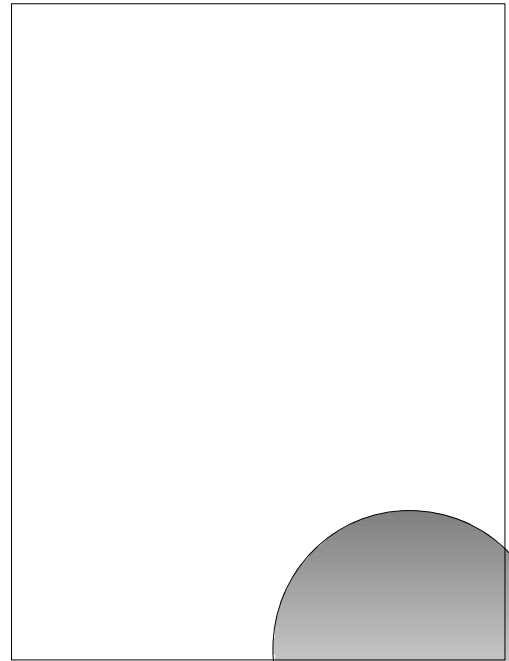
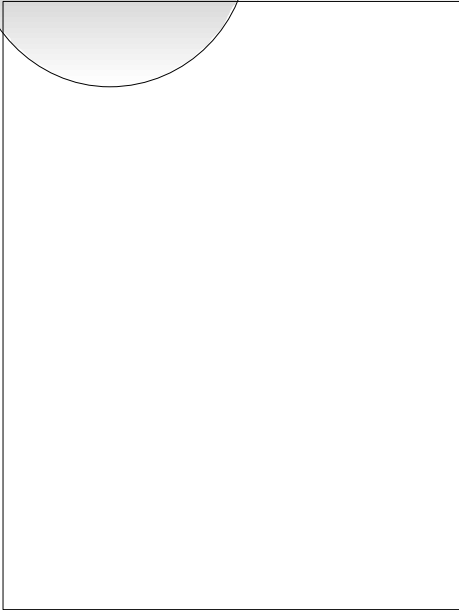
~堅信を受けられた方々~
おめでとうございます!

- | | |
|-------------|--------|
| ペトロ | 山田 聖治 |
| パウロ | 中山 祐太 |
| マリア | 大竹 里奈 |
| ドミニク | 小川 純平 |
| マリア・セシリア | 小川 美智子 |
| アグネス | 古澤 知裕 |
| アンジェラ | 恒川 安奈 |
| アジのフランス | 吉田 兼磨 |
| ベアトリック・マリア | 平 富美恵 |
| テレジア | 田村 由美子 |
| ルイズ・ド・マリアック | 八幡 京子 |
| マリア | 間宮 徳子 |
| マリア・イザベア | 福田 朱美 |
| マグダラのマリア | 菊地 由紀子 |
| マグダレ・カイト | 山本 陽美 |

おかえりなさい!

サニ神父様歓迎会

(11月30日)



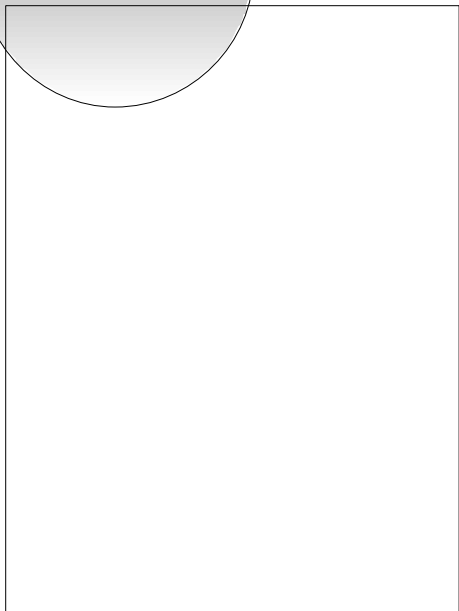
七五三

(11月9日)

黙想会

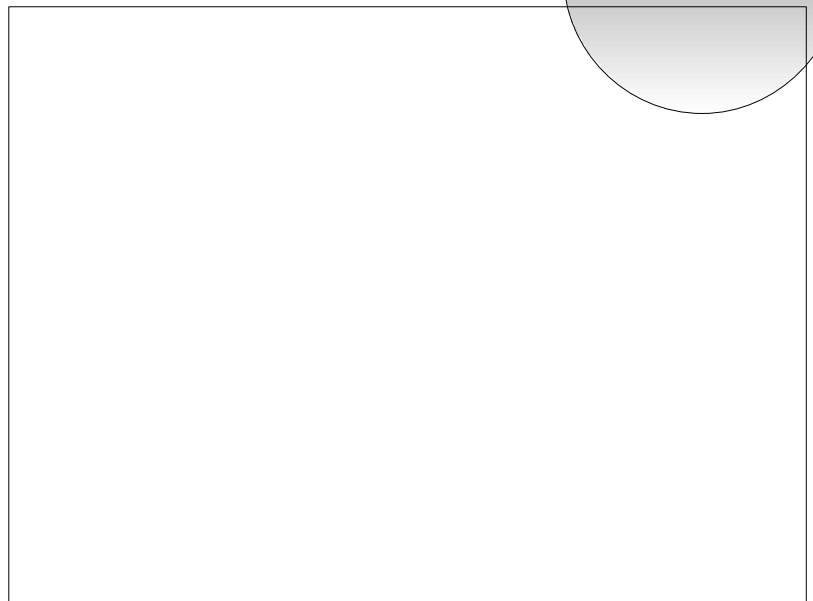
(12月14日)

指導司祭：アイダル神父様 (イエズス会)



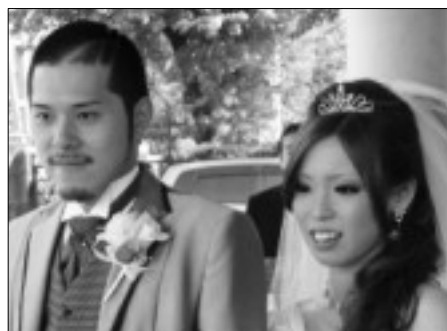
日曜学校クリスマス会

(12月20日)





信者動向



編集後記

行事予定

